

道標

——近代説話——

豊島与志雄

青空文庫

ソファーにもたれてとろとろと居眠った瞬間に、木原宇一は夢をみました。森村照子と広い街道を歩いてる夢でした。今晚彼女と一緒に三浦行男氏を訪れることになっているし、しかもそれをどうしたものかと未だに迷っている、そういう意識があつたからでありましょうか。そして夢の中の彼女は、背の高い大きな体軀で、巨木の幹のように泰然と構えています、不思議なことに、その容貌が全然分りませんでした。もつとも、夢の中では、妖怪変化は別として、人間については、その姿形が見えるだけで、顔立や表情は殆んど見えないのが、普通のことでありましょう。木原宇一の夢の中の彼女も、照子だということが分つてただけで、その顔付や表情は全然分らず、姿態が大きくはつきりと見えるだけでした。その彼女と、彼は連れ立って歩いてゆきました……。

何の岐れ路もないただ一筋の真直な街道。地面は乾いているらしいが、埃ひとつ立たなかつた。私は——（夢の中ではもう木原宇一でも彼でもなくただ私であつた）——私は、照子に言っていた。

「私はあなたを愛しています。あなたの眼を、あなたの髪の毛を、あなたの手を、あなたの足を、あなたのありとあらゆるものを、ひたすらに愛しています。昔から愛していまし

たし、今も愛していますし、将来も……。」

照子は黙っていた。それは別に不思議ではなかった。黙っているのが本当だった。私はとぎれとぎれに、いろいろなことを言った。

「私はあなたを愛するようになってから、次第に、酒に親しむようになりました。これはどういうことでしょうか。私はあなたを愛していますし、あなたから愛されることを知っています。愛し愛される者は、やたらに酒を飲んで酔っ払うことなんかない筈ではありませんか。だが私は、よく酒を飲んで酔っ払います。どうしたことなのでしょう。」

照子は黙っていた。

街道の両側は荒野らしく、痩せ細った灌木や雑草があちこちに生えていた。

「あなたはしばしば、今の家庭生活が嫌だと言い、家を出てアパート生活でもしてみたいと言いました。そういうこと、つまり、現在の境涯に不満で新しい境涯を待望するというようなことは、若い女が男に向って訴える場合、時とすると、愛の告白ともなることがあります。あなたの場合も多少その色合がありました。そしてあなたの言葉は私の心に媚びました。けれども、話が抽象的なことから次第に具体的なことに及ぶと、私は一種の驚きを感じ、次には反撥を感じるようになりました。あなたの家が百万長者であろうと、そん

なことは問題ではありません。あなたのお父さんがいろいろな会社の重役であることも問題ではありません。あなたのお父さんは大して学問もなさらず、独力で孜々として今日の地位を築いてこられたことも、問題ではありません。あなたがちよつと好きだったらしい人が、こんどの戦争で戦死されたことも、問題ではありません。あなたが教養の一つとして、三浦さんから絵画の指導を受けていられることも、問題ありません。ただ問題なのは……ああ、あなたはどうしてあんなことまで私に話したのですか。

「あなたのお父さんは、家庭内で絶対専制君主だそうですね。一度こう思いこんだことは、是が非でも押し通されるそうですね。どんな用事でも、一度口に出したら、側の者がうっかり聞きもらして尋ねても、もう二度とは言われぬそうですね。家の出入りには、家人の誰かが必ず玄関に三つ指をつけて送迎しなければならぬそうですね。家人達と食卓を共にせず、別な室で独りお膳に向われるそうですね。風呂をわかす日に、帰宅が後れて、家人の誰かが先にはいつている時には、もう風呂にはいらぬそうですね。或る親しい友人が、その細君の歿後、昵懇な芸妓を家に入れると、すぐに絶交されてしまわれたそうですね。その他さまざまなことをあなたは私に話しました。今時もまだ、そういう風な家長がいぬことはありません。殊に古い大家には残っているでしょう。だがあなたの家は、

お父さん一代で現在の富と地位とを築き上げられたのではありませんか。それもまあよいとしましょう。ただ、私の腑に落ちないのは、そういうことを話す時のあなたの言葉の調子です。

「あなたの語調には、聊かの反感も見えませんでした。うちの家庭の空気は嫌だ、窮屈で息が自由に出来ない、などとあなたは言いながら、それが具体的な事例となると、眉ひとつひそめるでもなく、単なる話柄として話しました。ばかりでなく、なにか得意げなもの、一種の誇りに似たものが、あなたの語調には籠っていました。それが次第に私の心を苦しめました。

「一口に言いましょう。あなた方は、あなたを含めてあなた方は、私とは異った種族です。私とは違った空気を呼吸してゐる人々です。そして私はそういう人々を、本能的に嫌悪します。自由とか平等とか人間性とかいう名のもとに、いろいろ理由づけも出来るでしょうが、そういうことをぬきにして、私はただ本能的に嫌悪します。本能的に……だから打明けて言えば、あなたのお父さんの森村源五右衛門という名前も嫌いです。私の名前だって一向香ばしくはありませんが、然し、源五右衛門は少しくひどい。名前は父親がつけてくれたもので本人の責任ではないとはいえ、改名することも出来るじゃありませんか。

「三浦さんがいくら骨折つて下さろうと、また私とあなたが如何に愛し合つていようと、森村源五右衛門のお嬢さんと一介の出版編輯者の下っぱの木原宇一との結婚は、これは出来ずまい。私ははじめ結婚のことを殆んど考えていませんでしたが、それを考えねばならない段になつて、そしてあなたからいろいろな話を聞いてるうちに、結婚の可能性が次第に薄らいでいった、そのことが私は悲しいのです。悲しい余りに酒を飲みました。酔いました。ねえ、酔つても宜しいでしょう。酒は純粹です。酔いは純粹です。少くとも人間ほど複雑不純ではありません。」

照子は黙つていた。

土地はますます荒涼たる趣きを増してきた。街道にも石ころが多くなつた。だが私達は、互に後れもせず先立ちもせず、相並んで進んでいった。

「私はあなたを愛することに変わりはありません。胸が苦しくて息が出来ないほど愛していません。別々な個体であることが悲しく、一つに溶け合いたい思ひです。そうなのに、あなたはなぜ森村源五右衛門のお嬢さんなのでしょう。どうしてそうなのでしょう。」

街道は海に突き当つていた。そこは崖になつていて、崖の下には満々と海水が湛えていた。私達はそこに屈みこんで、海を眺めた。もう私も口を噤んだ。言うべきことも、考え

ることも、一切が無くなった。時間も停止した。絶対の静けさだった。

崖下の海水がひいていった。干潮時なのだ。私達は立ち上った。そして照子は崖上に残り、私は崖下の砂浜へ降りていった。左手にまるく彎曲して海岸線の、その彼方に、賑かな町家の一廓があつて、そこに多くの酒があつた。私はその方へ歩いていった。照子は崖上に突つ立って、じつと私を見送っていた。彼女は私について来ることになつては、その自然の約束が解かれて、一人崖上に残つて私を見送っていた。その彼女を背後に感じながら、私は歩き去つた。非情で純粹な酒がたくさん彼方にあつた。砂浜は濡れて平らだった。そこへ突然、海水が満ちて、波が寄せてきた。私は足をぬらしながら飛びのいた。

夢から出て、木原宇一は足先が冷えきつてるのを感じました。そして立ち上ると、はつきり眼がさめて、その場の光景が幕を切つて落されたように現出しました。

ビールやウイスキーを飲んでる者もあり、煙草をふかしてゐる者もあり、歩き廻つてゐる者もあり、そして皆賑かに談笑しており、蓄音器も鳴つていました。もう電灯がともつていました。光度が低く、室の空気が濁つていて、窓硝子が灰白く浮出していました。片隅に、森村照子もいました。

照子の姿を認めて、木原は眼を見据えましたが、すぐに納得がゆきました。

会社の編集部だけの、新年のささやかな祝宴でした。仕事の関係や物資の関係で延び延びになっていたのが、漸く一月の末に催されたのでした。編集部の広間をそのまま使って、ちよつとしたお茶の会ということで、菓子に果物にハムの類と最後にどんぶりの食事、その代りにはビールとウイスキーが相当多量に用意されていました。その飲物の豊富なのが知れ、茶目なのがついて、職場ダンスをやろうと提議し、蓄音器まで持ちこまれていました。編集部員の三十名あまり、女は多く食べ、男は多く飲み、ごく少数の者がレコードに合せ踊りました。来客も自由に迎え入れられました。それは殆んどなく、たまたま森村照子が三浦行男からの使いでやって来ますと、むりに引留められました。——画家の三浦行男は、単行本の装幀や雑誌の表紙とカットなどのことで、会社と密接な関係がありました。編集部のこの新年茶会の案内を受けていましたが、用事が出来て出られないとかで、森村照子を使にして、ピーナツの特製缶詰五個を届けてきたのです。茶会だからピーナツの缶詰はまあ適当なところでしょうし、三浦行男としてはそれで一応の仁義をつくしたわけでしょうが、然し、文学者などに批評させれば、そこにはなにかセンスの不足が感ぜられるのでした。

木原宇一は眉をひそめました。そして彼は次にまた一層眉をひそめました。——照子は彼に囁いたのです。

「茶会がすんだらすぐに来て頂きたいと、三浦先生からのおことづけでした。御食事の用意もして待っているからと、仰言っていらいっしやいました。」

木原が黙っていますと、彼女は口早に囁きました。

「電話が通じなくて、困りましたのよ。いらっしやいますわね。」

木原は機械的に頷きました。

三浦さんが至急逢いたがっているとすれば、それは多分、照子に関することであろうかと、木原は考えました。然し、照子はいつもの通りの様子で、心に何の懸念もなさそうでした。——木原はもう酒をたくさん飲んでいる上に、更にまた飲みました。そして酔いました。

照子とのことを近頃いろいろと思ひ悩んでる上に、前夜は思わず読書にふけて殆んど眠らなかつたし、なにか苛立つた憔悴のうちにありますので、なおのこと酔いました。そしてソファーにもたれてとろとろとしましたが、眼がさめてみると、広間の光景が、同僚たちの有様が、へんに生々しく眼に映じてきました。三浦さんの家へ行ったものかどうかと、頭の奥のはるかな片隅で考えながら、広間の中を見渡しました。

白い塗料がくすんでる高い天井、幾つかの広告ビラが鋸でとめてあるだけの裸の壁面、コンクリートの床、配置を乱して一方へ片寄せられてる卓子や椅子……見ようによつては空き部屋とも思えるその長方形の広間に、なにか嘲笑の空気が漂っていました。それは何から醸し出されたものでしょうか。独特な思想を持つてる者や、常識的な共通な思想を持つてる者や、何等の思想をも持たない者たちが、各自に勝手なことを饒舌りちらしていたからでありましょうか。甘いのを好きな者や、酸っぱいのを好きな者や、辛いのを好きな者たちが、各自に飲んだり食ったりしていたからでありましょうか。新しい靴をはいてる者や、破けた靴をはいてる者や、代用靴をはいてる者たちが、各自に自分の靴のことなど忘れてしまつていたからでありましょうか。寒くて震えてる者や、熱くて汗をかいてる者や、熱くも寒くもない者たちが、各自にそのことを自意識していたからでありましょうか。それは兎に角、彼等の中にまた上に、嘲笑の気がたなびいていて、それが、道化てみる、もつと道化てみると、囁いてるようでありました。そして彼等は各自に、道化者になりたがりながら、一方ではその気持ちを自嘲していました。

木原は窓のところへ行つて、それを開けました。外はへんに明るく、次に白く見えまして。雪が薄く積つていて、まだちらほら降つていました。

長身の白井がやって来て、上から木原の肩を捉えました。

「おい、寒いじゃないか。雪見はあとにして、こつちい来いよ。まだウイスキーがたくさん残っている。」

白井の口笛に歩調を合せて、二人は酒の方へ行きました。

その向うで、山崎が道化ていました。

彼は照子の手を執つて、一人でダンスのまねをしていました。

「意外ですねえ、あなたがダンスを知らないなんて。」彼はくると廻りました。「いや、そんな筈はありません。」またくると廻りました。「然し、僕と踊つて下さらなくても、一向構いません。」またくると廻りました。「森村家の御令嬢で、三浦画伯の愛弟子で、そして……。」またくると廻りました。「そのお手を執らして頂いただけで、僕は充分に光栄です。」

彼はステップを踏んで、そしてくるくると廻りました。

そういう山崎に、片手の先を任せながら、照子は椅子にかけたまま、心持ち微笑を浮かべてるように見えました。貴婦人がサロンで男に応対する態度とも、言えないことはありませんでした。彼女は眼鏡をかけていましたが、その枠縁が目頭のところで白銀色にちらち

らと光り、近眼鏡の奥に眼眸が静かな光りを湛え、それら二つの光りが彼女を清純なものに見せました。

その時、どうしてだかよく分りませんが、或は、踊っている一組の者が近づいて来たのをよけようとしてか、或は、ちよつといたずらな身振りをするつもりでか、山崎は少しく照子に近寄りすぎたようでした。照子は立ち上りました。山崎はあわてて後退するはずみに、そばの卓子にぶつつかりました。卓上で、まだ半分ばかり残つてるウイスキーの瓶が倒れかかり、それへ照子は手を伸ばしましたが、瓶はすべつて床に転がり落ち、音を立てて碎けました。

床に流れたウイスキーを、山崎は、手でしゃくつて飲むまねをしました。

「おい誰か、ワンワンと吠えてみないか。そしたら僕が、犬のまねをしてこの酒をなめてみせる。」

「御婦人連にその合唱を頼もう。」と誰かが言いました。

笑い声がありました。

ところが、一陣の冷りとした気配が流れました。——照子は黒革のハンドバックを取つて、編集局長といういかめしい肩書のある尾高の方へ、真直にやっけて行きました。

「粗相をしました。弁償致します。」

百円札を五枚、彼女は卓上に置きました。

尾高は呆気にとられて、贅肉の多い頬をもぐもぐさせながら呟きました。

「そんなこと……いいんですよ。いったい、どうしたというんですか……。困りますねえ

……。どうせ、酔っ払った者が壊しますよ。まったく困りますよ。」

「いいえ、責任を果させて頂きます。」

「責任……何の責任ですか。」

「弁償致さなければ、責任が果せません。」

彼女の調子には抗弁し難いものがありました。それでも、それは理解しにくい変挺な事柄でした。更に言えば、不愉快な色合のものでもありました。ちよつとの間、誰もみな口を噤んでしまいました。とはいえ、これをはつきり見聞きしたのは、尾高の近くにいた者だけで、遠くの者はただなにか変挺な冷りとする気配を感じただけでした。

丁度、その場の空気を救うかのように、どんぶりの御飯が出て来ました。

木原宇一は、尾高のところへ行って言いました。

「三浦先生が至急私に逢いたいということですが、なにか外に、社の用はありませんか。」

「ああ三浦さんか。」尾高は卓上の紙幣から解放されたように眉根を開きました。「いずれまた連絡するが、宜しく言つといてくれたまい。」

木原は周囲の人々の思惑に顧慮することなく、ただ自分一人の思いに耽つて、そこを出ました。そして進まぬ足でゆつくりと階段をおりて、玄開へ出ました。雪は薄く積つてるきりで、もう降りやんでいました。ちよつと佇んで外套の襟を立てていきますと、いつしかそれが如何にも自然らしく、照子が追つついてきて肩を並べました。

「怒つていらつしやるの。」と照子は尋ねました。

「なんにも怒ることなんかないじゃありませんか。」と木原は答えました。

それは本当のことでした。然し、彼は怒つてはいませんでした、満足でもありませんでした。

——手袋もしていない手を、大勢の前で、長い間山崎に任せておくとは、どういうことだろう。但し俺は嫉妬しているのではないぞ。——自分が倒したのでもないウイスキー一瓶を、しかも飲み残しの僅かなものを、弁償する責任があるとは、どういうことだろう。俺の窺知し得ない心理だ。——あの眼鏡の枠縁の光りと、眼眸の光りと、二重の光りが、

如何に深く俺の心臓に喰い入ってくるのか。俺は泣きたい。

それらの思いを、木原は照子に語りたく、而も言葉は見付からず、ただ黙々として歩きました。

やがて、電車で、超満員の人込みの中に、二人肩を並べて立っていることに、木原は安心と喜びを感じました。全くの他人の中に、身動きも出来ないほど押し込められていることは、確実な抛り所を持つてると同じに感ぜられました。そしてその電車から降りて、広い空間に放たれると、いろいろな不安が湧いてきました。

電話が故障で通じなかったとしても、三浦さんがわざわざ照子を会社まで使によこしたのには、何か理由があつたに違いありません。二人でよく話し合い肚をきめて来るようにとの、謎だったのかも知れませんが。正月のはじめ、屠蘇の機嫌の上とはいえ、照子の父親が、照子ももう二十五歳になったのだから今年中には断然結婚させると、家人たちの前で言ったということを、木原も聞いていました。そしてあの父親のことだから、それは必ず実行するに違いありませんでしたし、既に実行にとりかかっているかも知れませんでした。そのことについて、照子は三浦さんに相談したのでしょうか。彼女は何事も三浦さんに相談しているようでした。もともと、木原が照子と識り合ったのも三浦さんの家でのことで

あり、初めて愛を語り合つたのも、三浦さんの家からの帰り途でありました。三浦さんは二人の間をうすうす感づいてるようでした。そして或る時、木原に向つて、君は本当に照子さんを愛しているのかと、真面目くさつて尋ねたことがありましたが、その裏には、既に照子から意中の告白がなされてることが明かでした。場合によっては僕が一肌ぬいでやると、三浦さんは最近に言いましたが、その裏には、照子からいろいろ相談されてることが仄見えていました。照子はなぜ直接に木原に相談しなかつたのでありましようか。

——おう、すべてが三浦さんだ。そして俺は一体何だろう。彼女の愛情の対象ではあつても、彼女の相談相手ではないのだ。

木原は空を仰いで息をつきました。曇つてる上にもはや暮れかけて、ただ茫漠たる思いだけが反響してきました。彼は夢のことを思い出しました。あの時、彼女はなぜいつも黙つていたのでしうか。あの海岸で、なぜ彼について来なかつたのでしうか。

丘陵地帯の崖上の、空襲による広い焼け跡で、ぽつりぽつりと小さなバラックが建つてる中に、道幅も定かでない昔の街路が真直に通つていました。それを、二人はゆつくり歩いてゆきました。

焼け跡の耕作地をまだらまだらに被つている淡雪を見ながら、木原は言いました。

「照子さん、あなたは本当に私を愛して下さいますか。」

照子も淡雪の方へ眼をやって答えをした。

「何度も誓いました通り、生涯かけてあなたを愛します。」

「生涯かけて……。」

「ええ、生涯決して忘れませんわ。どんなことがあっても決して……。」

忘れない、その言葉を木原は心の中で繰り返しました。そして十歩ばかりして、彼は低い声で言いました。

「あなたは、もう、私と別れるつもりですね。」

照子はちよつと立ち止まりました。それから木原の肩にもたれかかるほど身を寄せてきて、ゆつくり言いだしました。

「もう覚悟しておりますの。あなたが一緒に死んでくれと仰言れば、今すぐにも、御一緒に死にましよう。ええすぐにでも死にますわ。けれど、生きゆくのでしたら、立派に生きたいと思えますの。そのために、影でどんなに苦心してるか、あなたにはお分りになりませんわ。三浦先生にいろいろ御相談していますのも、そのためですの。結婚がもし出来るものなら、立派に結婚したいんですもの。身体一つであなたのところへ飛びこんでゆく

のは、あまり惨めすぎますわ。衣類も道具もなく、お金もなく、犬猫のような結婚をして、生涯蔑まれるのは、たまりませんわ。そんなことで生涯蔑まれるのは、女にとってどんなことだか、あなたにはお分りになりませんわ。三浦先生は、よく分って下さいまして、いろいろ力になって下さいますの。きつと、わたしたちのために、よいようにはからって下さいますわ。」

彼女は彼女の真実を言っていました。木原はそれをはつきり感じました。

——然し、それならば、俺は犬猫のような結婚を望んでいたものであろうか。いや俺も人間としての自尊心を持っている。ただ、彼女は、彼女一家は、そして三浦さんも、俺とは種族が違うのだ。

そして何よりも、彼女の言葉の調子が気持ちにひっかかりました。真実を言ってるのはあるが、それが、なにか血の通わない作文みたいに感ぜられるのでした。

舗装してある通路でしたが、所々に損傷があつて、雪解けの水溜りを拵えていました。考えこんで歩いてるうちに、木原はうっかりそこへ踏みこんで、片方のズボンの裾を泥まみれにしました。

「あら……。」

照子はハンカチを差出しました。木原はそれを受取って、ポケットに納めました。

「これは貰っておきますよ。」

泥水まみれの足を運んでゆきますと、四辻になりました。その向うの焼け残りのところに、三浦行男の家がありました。木原は四辻の真中に立ち止りました。

「先に行つて下さいませんか。私はちよつと、その辺で一杯やって、元気をつけてから参ります。」

照子はちらちら光る眼で、じつと木原を見つめました。

「二人一緒に行つては、なんだか変ですよ。すぐにあとから行きます。」

頬の筋肉が震え、眼に涙が出てくるのを、木原は自ら感じて、そのまま向きを変え、四辻を左へ曲つてゆきました。そのこの坂の下のあたりに、酒と小料理の店が幾つかあるのを、彼は知っていました。

彼は坂道をおりかけました。背後に照子のことが意識されました。焦茶のオーバーにきつちり身を固め、肉色のストッキング一枚のすらりとした足でつつ立ち、カールした髪の毛の下に眼鏡と眼眸とを光らして、こちらをじつと見ていることでありましようか。木原は振り向きたい衝動に駆られました。或は、その物影に走りこんで、身をひそめて、窺

いたくも思いました。照子が後を追って来るかも知れませんでした。然し、彼は齒をくいしばって抵抗しました。

——俺の将来を、俺の陣営を、純粹に保つためだ。四辻をこちらに曲つたことが、俺の今後の道標となるだろう。曲つたのではなく、却つて真直に歩いたのだ。あすこを真直に行ったら、俺にとっては曲つたことになつたらう。

彼は眼をつぶつて歩き、一度は滑つてころび、それから足を早めました。

その坂下の小料理屋で、木原はすっかり酔っ払つて、もう三浦行男の家へは行きませんでした。酔いつぶれながら、そして涙ぐみながら、道標とか、照子とか、胸の中で繰り返していました。

青空文庫情報

底本：「豊島与志雄著作集 第四卷（小説4【#「4」はローマ数字、1-13-24】）」未来社

1965（昭和40）年6月25日第1刷発行

初出：「文芸春秋」

1947（昭和22）年4月

入力：tatsuki

校正：門田裕志

2008年1月16日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（<http://www.aozora.gr.jp/>）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

道標

——近代説話——

2020年 7月17日 初版

奥 付

発行 青空文庫

著者 豊島与志雄

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>